

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 4 月 30 日現在

機関番号：11301

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2010～2012

課題番号：22652077

研究課題名（和文） デジタル映像技術を導入した人類学フィールド調査方法論の探求

研究課題名（英文） Inquiry of research methodology of anthropological fieldwork with the introduction of digital visual technology

研究代表者

高倉 浩樹 (TAKAKURA HIROKI)

東北大学・東北アジア研究センター・准教授

研究者番号：00305400

研究成果の概要（和文）：200 字程度

本課題は、デジタル映像技術の発展を背景に、人類学的研究の新たな方法とその可能性を探ろうとするものである。具体的には、(1) デジタル映像技術と人類学調査研究に関わる最新知識の解明、(2) 映像人類学の基盤的知見の探求、(3) 日本の人類学における写真史に関わる総説的知見の探求、(4) デジタル映像技術を利用した研究成果発信方法の開発である。結果としてデジタル映像技術を利用した人類学調査は、調査者と被調査者との関係の相対化をふくむ双方向性的なものになっていること、この特性を利用することで人類学の知見はより効果的・説得的に社会に提起されうることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：200 字程度

In the background of the development of the digital visual technology, this project explores the new methodologies and the potential of the anthropological research. As the concrete tasks, (i) the inquiry of the latest knowledge of digital visual anthropology, (ii) the exploration of the general knowledge of the visual anthropology in British-American contexts, (iii) the exploration of the Japanese history of anthropological photography, (iv) the development of the methodology of the public anthropological practice using the digital visual technology. My first finding is that anthropology with the digital technology becomes rather collaborative orientations including the replacing the relations of fieldworkers with informants with the interlocutor. Another finding is the possibility of social engagement of the anthropological knowledge with digital technology much efficiently and persuasively.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	400,000	0	400,000
2011 年度	400,000	120,000	520,000
2012 年度	200,000	60,000	260,000
年度			
年度			
総計	1,000,000	180,000	1,180,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学・民俗学

キーワード：映像人類学・民俗写真・展示・デジタル映像・応用人類学

## 1. 研究開始当初の背景

近年のデジタル映像技術の発展は極めて早く、激しい。高画素のプロ用デジタルカメラの廉価化、デジタルビデオカメラの普及、さらにGPS機能などの多機能デジタルカメラの普及が急速に進んでいる。また映像を撮影する道具だけではなく、映像処理ソフトや大型出力プリンタも容易な操作性と入手しやすい価格となっている。

従来、人類学研究では、写真・動画いずれも研究資料あるいは民族誌映画というかたちの研究作品として重要な位置づけをもってきた。また映像資料は研究成果の社会還元媒体としても利用されてきた。それゆえに、近年のデジタル映像技術の発展はその研究方法から成果提示のあり方に大きな影響を及ぼすというのが研究開始当初の見立てであった。

と同時に本研究事業を計画するにあたって事前調査をするなかでわかったことがある。それは写真・動画いずれにしても映像資料と人類学の関係についての基本的な知識が整理されていないこと、特に人類学者がどのようなかたちで写真や映像を利用してきたのかその歴史についての整理が行われていないことであった。英米の人類学ではこの点について多くの研究の蓄積がされているが、日本人類学においては、例外的な研究論文はあるものの、そもそも総論的な知識・知見がまとめられていなかった。

## 2. 研究の目的

上記の事情を問題意識として出発し、本研究課題は、デジタル映像技術の発展を背景に、人類学的研究の新たな方法とその可能性を探ろうとするものとして企てられた。具体的には、(1) デジタル映像技術と人類学調査研究に関わる最新知識の解明、(2) 映像人類学の基盤的知見の探求、(3) 日本の人類学における写真史に関わる総論的知見の探求、(4) デジタル映像技術を利用した研究成果発信方法の開発である。これらの目的を遂行する中で、デジタル映像技術を利用した人類学調査法と新たな研究成果の提示について開拓することを目指したのである。

本研究事業に関わる研究領域は、デジタル映像技術という未知の領域に絡むこと、また従来日本ではほとんどその研究成果が明示されていない領域である。それゆえに手探りの状態で始めたという点で挑戦的萌芽であった。

## 3. 研究の方法

本研究課題の方法は、基本的には映像人類学に関わる既刊論文・著作による文献研究である。それに加えてデジタル映像技術につい

ては、プロのカメラマン・映像作家を研究協力者とすることで最新知識を教授してもらう体制を整えた。また写真史研究においては、オリジナルプリントの熟覧を繰り返すことで、写真史研究の方法を身につけることを試みた。デジタル映像技術を使った研究成果の提示方法については、研究成果の社会還元を目的とした映像の展示方法の開発ということで、応用映像人類学や博物館学などの知見の理解に務めると同時に展示を実際に行うことで実践的知識を身につけることを方法とした。

## 4. 研究成果

三年間の研究活動を通して、以下の4点についての研究成果を得た。

### (1) デジタル映像技術と人類学調査研究に関わる最新知識の収集

これについては、デジタル映像と光学映像の技術的差異を含めて、デジタル映像における即時性・拡張性・可変性が、研究資料としての証拠性を揺るがすような側面を持つと同時に研究過程そのものの協働性を開く性質をもっていることを明らかにした。光学映像における現像という化学的過程が、デジタルの場合PCにおける情報処理＝加工となるために、そこで研究者以外の参加者との協働が可能となる。すなわちデジタル映像技術の利用は応用人類学・実践人類学に直結するものであることがわかった。

このデジタル映像技術の特質をさらに学ぶために専門家を招いて公開ワークショップを開催した。具体的には東北大学において2011年2月17-18日に、研究協力者の齋藤秀一氏（写真家・映像作家）と共に「フィールドワーカーのためのデジタル映像ワークショップ（ビデオ編）」を開催した。この準備及び企画での演習・討論を通して、組み写真の手法と動画記録の構成方法は基本的に同じ構造にあること、また動画記録方法にある「ショット」や「シーン」等の概念と、民族誌記述における相違点と共通点を理解することが出来た。

さらに2011年度においても同様の「民族誌映像ワークショップ」を6月22日、7月13日、8月24日、9月11日、10月26日、1月25日の6回にわたって開催した。この事を通して写真と動画の特徴とくに動画の編集方法を実践的に学ぶ機会を設けることで、組み写真と動画を組み合わせる手法について実践的な知見を得た。

### (2) 映像人類学の基盤的知見の収集

英米における映像人類学・写真史に関連する文献及び写真集の収集を行い、その内容の理解に努めた。これらを通して、人類学の調査方法において写真・動画がどのように使われてきたのか、その基礎的知見を得た。

特に民俗写真の利用は、人類学の黎明期から行われているが、それが観察の証拠性やイメージ喚起性に結びついているだけではなく、撮影者の意図を超えた情報媒体として資料価値、また調査において写真を用いた聞き取り調査をおこなう方法の可能性などについての手法を得た。

さらに、現在、映像人類学はデジタル化の進展に伴い、従来の撮影者と被写体の関係に観られるような調査者と被調査者との関係を刷新し、協働の民族誌映像プロジェクトへと移行していることを確認した。そのことは映像人類学分野だけでなく、博物館展示などに関わる関連研究分野でも急速に浸透しつつある。そこでは資料を保管するための博物館という従来の位置づけから、むしろ文化資源の再発見を社会に提案するための媒体としての博物館・展示という位置づけとなっていることがわかった。

それらの成果については日本文化人類学会第46回研究大会（2012年6月22-23日）で分科会「展示による社会的関与は人類学に何をもたらすか」を組織した。また自らの発表「協働でつくる編集過程」を発表し、デジタル技術の活用によって応用映像人類学として国内および調査地において展示が可能であることを示した。特に研究者がいわば文化の翻訳者として調査地と研究者との母国との間の国際・市民交流が可能であること、また展示の際に関わるデザイナー等の職業的専門家との資料への解釈が、異文化理解を実現するうえで重要なこと、彼らを含めた調査地の被調査者との協働によって、人類学・地域研究における応用的方法論が開拓できることを提示した。

### (3) 日本の人類学における写真史に関わる総論的知見の収集

人類学の主要な写真史の概略をまとめるという試みは、古典的民族誌の間で写真の使い方について相当の差異があり、当初想定しているように一律に分析・記述することは困難であった。その原因の一つは、申請者がそもそも写真史の記述方法を十分理解していなかったことに由来する。それ故に(2)の文献・作品研究を踏まえて、最初の探査的取り組みとして、戦後日本の代表的民族誌における写真を取り上げ、これを分析するという試みを行った。

なお、この作業を日本の写真史と関連づけ

て理解するために、東京都写真美術館で日本史写真史に関わるオリジナルプリント熟覧による調査を繰り返し行った。これらの作業を通して、人類学的写真史を記述するための資料選別方法及び実際の分析がどのように行い得るのかについての見通しも得た。また同じ写真を展示する場合でもあってもテーマ設定を変えて並べ替える事でイメージの解釈方向性は左右されることである。さらに写真展示を行う事は、調査者対象の関係・調査資料の共同管理などの点に関連して人類学研究方法全体に方法論的革新をもたらすという視点を得ることができた。

しかしながら、戦後の日本の人類学写真史概略記述という試みは十分成果を上げることはできなかった。というのも日本の人類学著作における民俗写真はあくまで副次的なイメージ資料として用いられており、そのことは現在にいたるまでほとんど変わっていなかったからである。撮影者の研究テーマや個人的指向によって題材には幅があるが、体系的な視点から写真を利用する意図を読み解くことは難しかった。

### (4) デジタル映像技術を利用した研究成果発信方法の開発

(1) や (2) の研究の進捗にともない、デジタル映像を用いた研究成果の社会発信を実践すると共にその方法についての知見をまとめた。具体的には2012年3月22日から24日においてロシア連邦サハ共和国エヴェノ・ブイタンタイ郡サクリール村で私自身が1990年代初頭に撮影した調査写真の展示を行った。これは、研究資料である民俗写真を現地に返還し、地域の歴史的資料とすること等を行う企画だった。この様子は現地の新聞報道などふくめて当該地域で大きな反響を呼ぶこととなった。

展示実践を通して、研究資料は資料それ自体が、被調査地の歴史記録・文化交流媒体となることを確認した。研究者は分析する以前の資料として、とりわけ写真などのイメージを積極的に利用することで社会貢献が可能であることが明らかになった。なお、その準備過程と展示およびその後については、15分程度の動画を制作し、YouTubeで公開している。これも公開後、現地から肯定的な反応を得ている。

この実践をとおして得られた方法論に関わる問題は、応用映像人類学や公共人類学の研究史を振り返りながら「旅する写真展示と協働の意義：調査地と母国をつなぐ応用映像人類学の試み」と題して、京都人類学研究会2013

年3月例会（京都大学）において報告した。結果として、デジタル技術を導入することで、写真・動画双方に関わる映像をつかった応用人類学のフィールド調査を自ら実践を振り返ると共に、そこに当事者や職業的専門家を含めた協働作業が入るための方法とその意義について理論的に明らかにすることができた。

以上四つの領域にわたって様々な研究活動を行ってきたが、これらを通して今後、映像人類学の基盤的知見について総論的な概説書（論文）をまとめることを今後の課題としてあげておきたい。またデジタル映像をつかった研究成果の社会的発信についての研究論文集は現在とりまとめ中である。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

①高倉浩樹「サハの農村部の人びとの現在の生活」北海道立北方民族博物館編『第27回特別展 東シベリア・サハ 永久凍土の大地に生きる』巻号無し、査読無し、2012年、21-36

②高倉浩樹「人類学と地域研究-シベリアをめぐる省察」『SEEDER』査読無し（昭和堂）2号、2010年、65-69

〔学会発表〕（計4件）

①高倉浩樹 「旅する写真展示と協働の意義：調査地と母国をつなぐ応用映像人類学の試み」京都人類学研究会 2013年3月例会、2013年3月21日、京都大学稲盛財団記念館

②高倉浩樹 「協働でつくる編集過程：民族誌写真と標本資料における断片性と本質性の新たな文脈化」日本文化人類学会第46回研究大会、2012年6月23日、広島大学東広島キャンパス

③高倉浩樹 「触媒としての研究者：トナカイプロジェクトの経験から考えること」民族自然誌研究会第66回例会「研究をひらく展覧会」2012年1月21日、京都大学楽友会館

④高倉浩樹 「民俗写真の旅-シベリア民族誌研究がつなぐ職業専門家と研究者そして二つの地域社会」公開研究会「展示実践を通じた北方人類学における社会還元の可能性の探究」（東北大学東北アジア研究セン

ター共同研究）、2010年10月26日、東北大学東北アジア研究センター

〔図書〕（計3件）

①高倉浩樹（編）、新泉社、「極寒のシベリアに生きる：トナカイと氷と先住民、2012年、257頁

②高倉浩樹・曾我亨、東北大学出版会、「シベリアとアフリカの遊牧民」2011年、i-ix, 77-161, 197-203

③高倉浩樹編、東北大学東北アジア研究センター、「日本人のみたトナカイ遊牧民-シベリア民俗写真を現地に戻して展示する試み（日本語/ロシア語双方テキスト）」、2010年、28頁

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

高倉浩樹

<https://www.youtube.com/watch?v=IcJlKnQ-80I> トナカイ遊牧民へ調査写真を戻す旅（ビデオ作品・YouTube） 2012年 15分間

Takakura, Hiroki

<https://www.youtube.com/watch?v=zEhSidKXUcU>

Trip to return field survey photographs to reindeer Nomads（ビデオ作品・YouTube） 2012年 15分間

Такакура, Хироки  
<https://www.youtube.com/watch?v=B-yFwG-M99o>

Саккырырскый олениво  
ды в фотографиях япон  
ских ученых (ビデオ作品・  
YouTube)

2012年 15分間

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

高倉 浩樹 (TAKAKURA HIROKI)  
東北大学・東北アジア研究センター・准教  
授

研究者番号：00305400

### (2) 研究分担者

なし ( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

なし ( )

研究者番号：